

浄土

1月号

法然上人鑽仰会発行

特別寄稿 法然の傷

梅原 猛

夏 攸吾 吉川英明 関 容子 稲葉小太郎 須藤隆仙





総合情報通信企業をめざす
日本テレコム

は
じ
め
に
押
し
て
ね、
0
0
8
8。



ゼロゼロ押したら ハッピーハッピー

0088

日本を楽しくする電話

お申し込み・お問い合わせはお客センターへどうぞ。



0088-82 (無料) / 0120-0088-82 (無料)

■受付時間 9:00~23:00 (年中無休)

0088なら●月々の基本料金は一切かかりません。こ使用になった通話料金
だけのお支払いです。●かけ方は簡単。現在お使いの電話機で、市外局番
の前に“0088”を押すだけ。●60kmを超える市外電話は0088がおトク。

山龍金

写真
夏 攸吾

下駄で歩く

ぶらり下町



浅草の観音さま、雷門



下町の名園、清澄庭園



「駒形とせう」の昼時

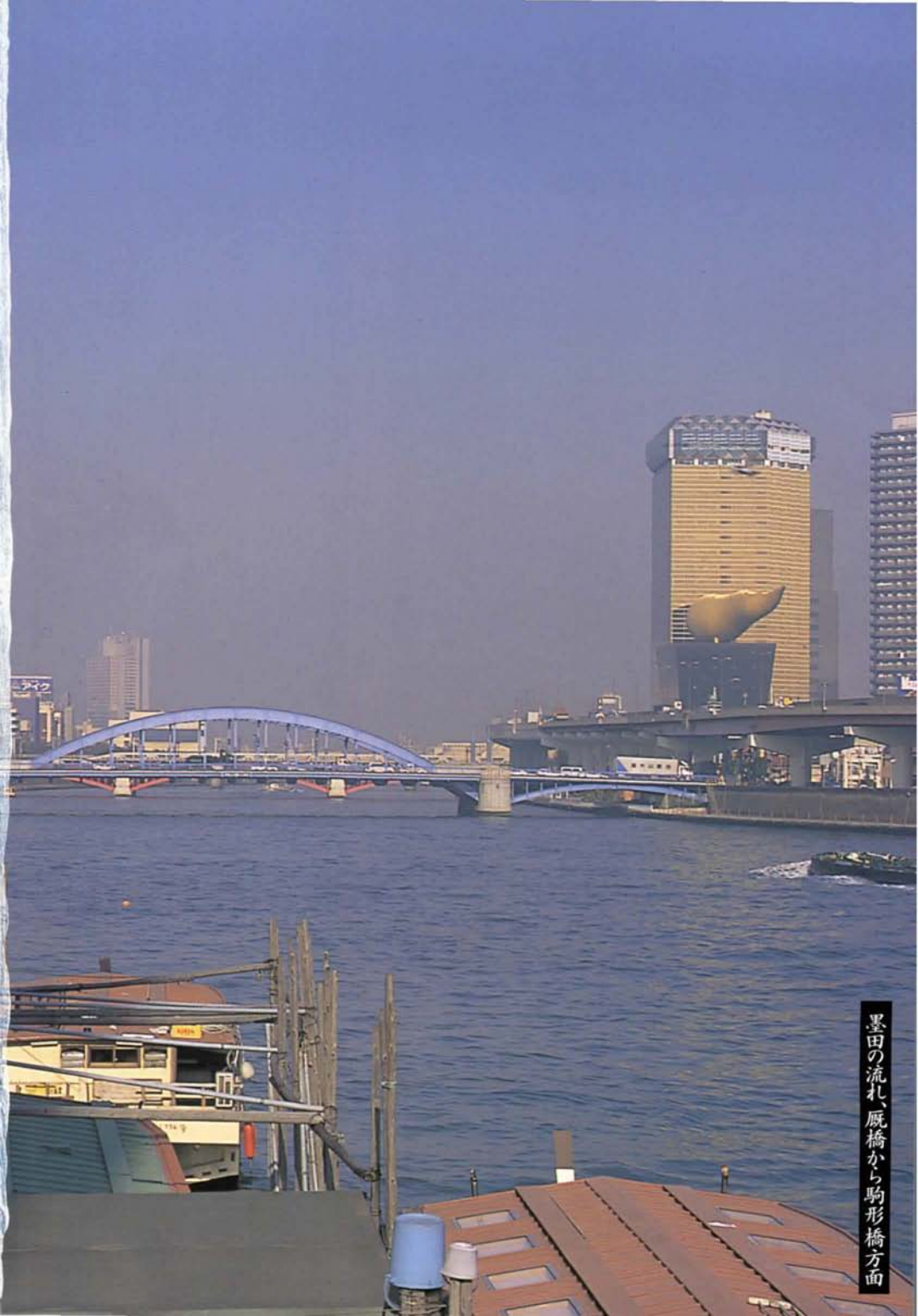


こね下町、深川江戸資料館



深川不動の門前で





墨田の流れ、厩橋から駒形橋方面

浄土



1995/1月号 目次

〔カラー口絵〕下駄で歩くぶらり下町……写真=夏 攸吾	3
〔表紙のこぼれ〕共に生きる—ブナ原生林から— 御所野洋幸	8
法然の傷 ……………梅原 猛	10
下駄で歩くぶらり下町……………夏 攸吾	22
午後の日差しの中で——〈最終回〉	
言葉の力……………吉川英明	30
楽屋ゆかた——④	
中村吉之丞(四)……………関 容子	38
現代の快僧——その11	
平和を祈って東京を歩く……………稲葉小太郎	44
念仏信仰の系譜—中国編—⑥……………須藤隆仙	56
編集後記……………	68

表紙題字=浄土門主 中村康隆貌下

表紙撮影=御所野洋幸

目次・編集後記イラストレーション=田村直巳

共に生きる—ブナ原生林から—

御所野洋幸

ここ近年、私たちのまわりの自然環境は、開発という名目で大きく変わってきた。そして今日、この劣悪化した環境を何とかしなければ、という声があがりはじめている。自然が死ねば人間も生きていけないのは自明の理。

そこで、今月から一年、秋田県のブナ原生林に何年も通って、その原生林の姿を写真に取りつけている写真家の御所野洋幸さんに「共に生きる」というテーマのもと、写真と共に原生林とさまざまな生物との関わりなどを著していただきます。(編集部)

森林の役割

日本各地の山村には、標高千メートル内外の地帯に群生する広葉樹林を、「伐ってはならない」という言い伝えがあるそうです。もし、伐ってしまうと、その後に杉などを植え



ても、必ず涸水や土砂崩れが起きると言われています。

森は水を貯え、土壌を作り、地球温暖化の原因になっている二酸化炭素を吸収し、また、鳥獣を育て、フランクトンや虫の育成まで行ない、結果的には魚類も保護しているといったさまざまな効用を持っています。そして、この森の働きの要にあるのがブナの原生林なのです。

ブナは樹齢百五十年くらいで、一本あたり約八トンもの水を貯え、一ヘクタールあたり年間十トン近い葉を落とします。だから雨が地表を走ることもなく、洪水を防いでくれるのです。そして、その果実は鳥獣を養い、落葉は土を肥やし、山菜や他の野草を育ててくれます。

日本列島のブナ林帯に沿って縄文文化があるのは、ブナ林が豊かな水をもたらし、山の

幸を与えてくれる生命の源であったからに他なりません。

故に、ブナは森の母、森の聖母、森の医者と言われているのです。

また、森林はさまざまな生物の共同社会です。それぞれの生物が他の生物の恩恵を受け、また他の生物に恩恵を与えています。どんな生物も単独では生きられません。もちろん人間も。陸上で最も大規模な物質循環が円滑に行なわれているのは、森林だけです。これに心をとめて、今月から始まる連載のテーマを「共に生きる」とさせてもらいました。

次回からは、原生林でのさまざまな出会いと、それに対して私の感じたことなどを撮影メモからの報告、という形で書いていきます。

ちなみに、今月号の表紙の写真は、平成三年一月二十日に撮影したものです。

法然の傷

梅原 猛



こ の頃私は法然について「中外日報」に連載している。今少し休んでいるが、また

近く始めたい。なぜ法然について書くかといえば、それは偶然である。講談社で『浄土仏教の思想』という選集を出すというので、私にも何か

書けということになった。私は専門の仏教学者ではないのであまり特殊なテーマは書きにくからうと、法然か親鸞か蓮如をやってほしいということであつた。

親鸞については私は既に何度か書いている。

それでまだまったく書いていない法然か蓮如を
ということになったが、友人は、蓮如をやった
ほうが私の性に合っている、蓮如をやったらど
うだと言ったが、どうも蓮如は私に似たような
ところがあり、かえって書きにくい。むしろ私
とまったく似ていないと思われる法然をやった
ほうがよいと思って、私は法然を引き受けるこ
とにしたのである。しかしなかなか本ができな
いので、『中外日報』に連載し、それを本にする
ことになった。

法然について書くように思ったのはそれだけの
理由ではない。私は名古屋にある東海中学の出
身であるが、東海中学は浄土宗の知恩院派の設
立である。私は寺院の出身ではなかったが、愛
知一中の入試に失敗し、私立の中学の中ではい
ちばんよい中学とされている東海中学に入學し

た。中学三年の頃、青春の悩みに襲われ、哲学
書や文学書を愛読したが、そのとき宗教研究会
を作って、友人と法然や親鸞の書いたものを読
む読書会を行なった。当時、東海中学の名誉校
長を仏教学者の椎尾辨匡氏がしていて、辨匡氏
から年に一、二回法話を聞いた。

私が宗教というものに多少でも関心をもった
のは東海中学においてであり、法然が私の宗教的
関心の窓口であった。その後、八高を経て京大の
哲学科に学んだが、京大の哲学科では、日本の仏
教といえどもやはり道元と親鸞の仏教であった。

私は道元にはなじめず、親鸞の著書を読み込んだ
が、私の学問的関心の中心は西洋哲学にあった。

私

は三十五歳のときに研究の対象を西洋の
哲学から日本の思想や文化に変えたが、
日本の思想や文化を理解するには何よりもまず

仏教を理解しなければならないと思い、聖徳太子以来の日本の仏教書をあらまし読んだ。私が特に親近感をもったのは、最澄、空海、それに親鸞であり、道元と日蓮は違った意味で私が理解できない仏教者であると今でも思っている。

法然は理解できないことはないが、もうひとつ親しみにくいというのが私の率直な法然に対する感想であつた。それはいつてみれば、法然には泣き所がないのである。最澄でも空海でも親鸞でもそれぞれ泣き所があり、その泣き所を抑えると、彼らの悩み、苦しみ、喜び、悲しみが^がありありと理解される。しかし、法然にはこのような泣き所がないのである。法然は、智慧は勢至菩薩と等しく、道德堅固で、もし一生不犯の祖があつたとすれば、法然こそその人であろうといわれる。

こういう生まれつき完成したとしか思われない聖者は、尊敬はできても親しみにくいのである。弟子の泰範を空海にとられて、返してくれと訴える最澄は哀れであるし、二十年の留学期間を二年に短縮し、日本に帰つた、欠期の罪を、自己の中国で学んできた真言密教のすばらしさを強調することによって懸命に免れようとする空海もまたかわいいところがあり、自己のもっている愛欲の煩惱を激しい言葉で懺悔する親鸞には、わが身につまされる思いがする。それで最澄や空海や親鸞はわれわれに親しいものになるのであるが、法然にはそういうところがなく、いつも澄みきつた悟りの境地を保持しているように思われる。

それで私は何となく法然になじめず、法然についての本を書いていないのである。ところが、

法然を論ぜずして鎌倉仏教はもちろん日本の仏教を論じることとはできない。仏教は鎌倉仏教をもって真の意味の日本の仏教を生み出したといえる。私は、鈴木大拙のように、日本の靈性は鎌倉時代に目覚めたという説には反対であり、平安仏教すなわち最澄、空海においてはもちろん、奈良仏教すなわち聖徳太子や行基においても、既に日本の靈性は目覚めていると考えるものであるが、鎌倉時代になって仏教はいつそう日本の特色を発揮したことは間違いないと思っている。

この鎌倉仏教のトップバッターが法然である。もちろん親鸞や一遍の仏教は直接法

然の流れを汲むものであるが、法然に対して口を極めて反対した。日蓮もまた法然から多くの影響を被っている。そして、道元もまたあのような

な大胆な思想を提出することができたのは、ひとえに法然という先例があったからである。

そのように考えると、日本仏教を深く知るには法然を研究しなければならないと思って、私の法然研究は始まったわけである。研究を始めて二年、今、法然は私にとって甚だ近いものになっている。なぜか。法然という人はその時代の人たちに深い印象を与えたらしく、法然についての御影は甚だ多い。そして法然伝もまた大変多く書かれている。これは、いかに当時の人、上は天皇や摂政関白から下は庶民、あるいは非人の類にまで法然という人格が忘れられない人格であったことを物語っている。

この伝記の最後に、四十八巻にわたる浩瀚な『勅修伝』というのができた。これが浄土宗の公の法然伝であり、この法然伝に基づいて法然は

理解されてきたのである。しかしそれは『勅修伝』という性格上、法然をできるだけ天皇に近い血筋の人として、しかも法然を生まれつきの天才であり、聖者であると人々に思わせるようにできている。たしかにそれは法然についての尊敬を増すにはまことによいが、法然を天皇家に近い血筋の人であり、生まれつきの天才であり、聖者であるとすることによって、かえって一般の人から法然を遠ざけたことになるのではないか。この法然死後百年後にできた『勅修伝』は功罪二面をもっているのではないかと思う。

法然について最も古い、最も信用すべき史料は、法然が最もかわいがった弟子である源智によって書かれたと思われる『醍醐本』であろう。この『醍醐本』は源智が直接法然から聞いたと思われる、唯円の『歎異抄』に比すべきものであ

ると私は考えるが、この『醍醐本』に『別伝記』というものがあり、それは簡単に法然の伝記について語っている。『別伝記』というのは、既に『一期物語』などで法然の人生と思想が語られているので、それを補う意味で別に伝記をつけたという意味であろう。この『別伝記』を中心とする『醍醐本』の記述を『勅修伝』よりより正確な法然伝とすると、法然の幼年時代の理解が通説とはだいぶん違ってくる。

『勅修伝』では、法然の父、時国が源内武者、明石定明によって殺されたのを法然九歳のときとし、父の遺言で法然は菩提寺にいた叔父、観覚の下で出家し、十五歳のときに叡山に行ったとある。しかし『醍醐本』の『別伝記』では、法然は九歳か十歳のころに観覚の下で出家して、大変賢いから京都で仏教を勉強させたい

という観覚の勧めで、父時国のところへ別れにきたが、時国は、「自分を憎んでいる人がいる、近く殺されるであろう。殺されたら菩提を弔ってくれ」と法然に言うのである。



そして、法然は都へ上って比叡山で出家受戒したが、父の予言通り、まもなく父は殺された。それで法然は深く無常を感じ、師の叡空の下を去ろうとしたが、叡空に、まず天台

仏教を学んでからでも遅くはないと言われ、

「天台三部経」を学んだが、法然の心は深い孤独と寂寥にあり、その後も彼は書庫に閉じこもって隠遁者の如き生活をしたというのである。

これは『勅修伝』がいうような、父が殺され、それで出家したといういかにも万人が納得できる出家とは違う。法然は押領使であつた父時国の一人っ子であつたはずである。この一人っ子になぜ出家させたか。これは理解困難な所業であるが、時国が法然に語つた言葉を考えれば、時国はわが身に迫つた殺害の運命をいち早く予期したからであらう。自分は殺される。乱世の慣わしとして、襲われたら一家すべてが殺される。時国はあらかじめその運命を予期して、せめてわが子だけ助けるように法然を出家させたのであらう。

『勅修伝』では、押領使というものを土地の名望家であると考えるが、当時の押領使はなかなかそのようなものではない。「横領」という言葉はこの押領使から出たといわれるが、押領使というものはもともと成り上がり者の武士であり、国家は当時、力を得てきた成り上がり者の悪党を抑えるのに、その成り上がり者の一人を選んで押領使という役にしたのであらうが、押領使そのものが政府の権力を笠に着て、かえつて悪党よりも悪い行為をすることが多かつたのである。

おそらく、時国も押領使である以上、そういう悪を免れず、明石定明に深い恨みを買つたのであらう。出世のために京に上り、叡山で仏教を学ぼうとするわが子法然に、「わしは近く殺される、わしが死んだら菩提を弔ってくれ」と

言う時国の心は尋常ではない。その時国の心は、この敏感な少年、法然の心の奥に深く突き刺さったにちがいない。そして叡山に行き、叡空の下で出家したとしても、それどころではなかったであろう。

そして、出家受戒した法然の耳に父殺害のニュースが入る。法然はそれを聞いて師の下を辞そうとしたのは当然である。師の下を辞してどこへ行こうとしたのかわからないが、おそらく乞食僧の仲間投じ、一人、父の菩提を弔おう



としたのであろう。

「法然伝」では、都に上るとき、母と別れた話を記しているが、その後、母はどうなったか、一言も記してはいない。また法然が流罪になったときに、母の手紙を張り合わせて、法然自身の像を作り、それが「張り子の御影」として、今、浄土宗西山派の本山、粟生の光明寺の本尊になっていて、母への愛がただならぬことを示している。

母

の里は秦氏である。父のほうも漆間であり、父と母は親戚であったという伝記もある。父の家も母の家も姓からみて職人階級である。そして秦氏は明らかに渡来人である。もし父の家と母の家が親戚であるとすれば、それは漆間氏も秦氏の一門であるということになる。法然の両親が子供の誕生を祈ったという本山寺

は羽多神社とセットであることを考えると、やはり漆間も秦から出たとみなければならぬ。

法然の出自が渡来系で、職人階級であるとすれば、農民が主体の律令政府からは何らかの意味で二重に差別されていたと考えねばならない。法然が自らのことを「辺境の土民」とか「烏帽子をかぶらざる人なり」と言うのは、自らが多少差別を受けている、田舎のところに足らぬ家の出身であることを語っている。

法然の父は間違いなく夜襲で殺されたが、母のほうも、誕生寺に伝わる母の命日という日を『醍醐本』との関係で考えると、やはり父が殺されたときに一緒に殺されたのではないかと思われる。法然十五歳の春、法然は都に上り、その秋の暮れに出家受戒をし、まもなく父と母の殺害のニュースが法然の耳に入ったということ

になる。法然のところへきた母の手紙というものも、その期間を考えるとそんなに多くではないと思われるが、父の予言のように一家殺害の不安に怯える母の手紙はどんなものであったか察しがつこう。

その母の哀れさは深く法然の胸にくすぶり、法然はその手紙を長い間肌身につけて持っていたのであろうが、流罪となって、いつ死ぬかわからず、法然の死後、もしもそれが人目に触れたら大変だと法然は思ったにちがいない。その手紙でもって法然の自刻像を作って永久に保存し、母子一体の末永き記念物を作ろうとしたのであろう。

このように少年時代をみると、法然の心がよくわかる。後年、法然が立てた法然の浄土教は、念仏の解釈を今までのような観想念仏にとらず

に、口で「南無阿弥陀仏」を称える称念としたものであった。念仏を称念とすることによって、念仏は初めて日本の民衆のものになったのである。『選択集』でも、念仏を観想と解釈すれば少数のものしか救われず、大多数の民衆は極楽浄土に行けないことになる述べている。仏教において最も重要な思想は平等思想である。法然は浄土教を真の意味における民衆のものとしたのであり、浄土教を平等化したのである。

法

然の仏教解釈にはいささか偏執の趣がある、法然に同情的であった天台座主、

顕真も言ったという。現代において、法然研究者も、法然は善導の説に従って念仏の解釈をもっぱら称念、すなわち口称念仏としたと言うが、その善導解釈にも問題があり、必ずしも善導は念仏を口称念仏に限ったわけではないという。

このことを頭脳明晰な法然が知らないはずはない。法然は理論的に多少無理をしても、念仏の解釈を口称念仏に限らざるを得なかった。そ

うしないと極楽浄土に往生できる人は特殊な能力をもつ僧や金持ちに限られ、煩惱に悩まされ、学問ももたない民衆が極楽浄土に往生すること



ができないからである。そう解釈しないと、仏教の最も大切な徳である平等の徳が実現されないのである。

法

然は、このように画期的な新しい念仏の解釈を行ない、知なき徳なき財なき日本の民衆に極樂浄土への往生への道を開いた。それは行基菩薩に比すべきみごとな利他行の実践であつた。行基と法然によつて仏教はまさに日本の民衆の底の底にまで届いたのである。

堅く戒行を守つた僧である法然が、悪人が往生できる仏教を説いたのはおかしいといえばおかしい。しかし私は、法然が「悪人」と言うとき、その犯した悪行の報いを受け、殺された父の姿が見えていたのではないかと思う。悪人は他人のことではない。自分の父のこと。そして、その父の血を引いた自分自身のことである。ま

た、悪人という意味の中には、悪を犯さざるを得ない、殺生を犯さなければ食っていけない差別された民衆の姿があつたにちがいない。それも法然は母のこと、父のこと、ひいては自分自身のことと感じたのである。

法然の思想の根底には女人往生の思想があるという。「三部経釈」の中にはその女人往生の思想が強く語られているが、その女人というときに、何らかの意味で差別された階級の出身であり、しかも夫とともに殺された母の姿であつたのではないか。そして、その父や母を成仏させたいと法然は心の底から考え、大胆極まる新しい念仏の解釈を行なつたのであろう。

法然の子供の頃のことがこのようにみえてきて、法然は急に私にとつて親しい人になつたのである。

(国際日本文化研究センター所長)

下駄^{ぞり}で 歩く下町

文と写真 夏 攸吾

ぶらり下町

取材で年中、あちこちほつき歩いてるから、せめて正月くらいは家族と過ごす。

家にいて、「ぶらりとどこかへ」てことになる、そりやもう、だんぜん下町だ。

そこで一日、(私^{わたし}の下町案内) 胸に

あれこれ思案しつつでかけてみれば、真っ先に足の向く先、やっぱり浅草。ここを(素通りは……)できないのだった。

それにしても、「浅草の観音さま」は大した人気だ。お上^{のり}りさんやら外人さんやらも交え、参詣する庶民の姿はひきもきらない。肩肘張らず、ざっくばらんに在るから愛される、それでこそ





観音さまの境内で遊ぶ

の大衆信仰だった。

身についた仕草で、門前に足を留め、手を合わせていく人……私の大好きな情景も、変わらない。

仲見世の石畳をカタコト歩く、私のいてたちは作務衣に下駄履き。取材のカメラを構えながら、いつもと様子の違うのに気づく。前にカメラ、振り返れば後ろにもカメラ、私のほうが狙われている。下町でも、下駄はすでに珍しい履き物になっていた。

ところで、なんてそんなことになったのか、といえば……。

口惜しいけれど、私や「川向こう」の生まれ、「三代続いた江戸っ子」の仲間にや入れてもらえない。が、日本橋に生まれ育ったお父つつあんに、さ

んざ連れ歩かれた下町がふるさと。気分なら負けるもんじやない。

いわゆる江戸時代の御府内、神田神保町に仮りの住まいの仕事場をもって、機会があれば下町気分を綴ってきた。

そんな私の文を買ってくださるある先輩から、「下駄で歩く下町……なんての、どこかで連載たからおもしろいね」と言われてたのを、ふと思い出したからだ。根が単純だから、すぐその気になる。

あのこと正月といえば、観音さまに初詣してから年始まわりが、きまり。一家そろって着物に下駄か草履の、懐かしさもあった。

観音さまにでかけると、かならず寄ったのが仲見世裏の蕎麦屋。そこで私

向島、長命寺桜餅



は、「もり」ですすりこむ蕎麦のうまさを覚えた。

はじめは、お父つつあんやまわりの男たちの注文を真似た。どうやら種物は、女子どもの蕎麦らしかったから。すると店の人から、「坊や、蕎麦つくいだねえ」などとおだてられ、うれしくって、それからずっとより一筋だ。おかげで、嘶家が高座で演じる古典落語の芸そのまのすすり方、いまじやすっかり身についている。

だから、蕎麦の好みも人さまざまだけれど、きれいに箸にさばけて長さも適当なのが、私にとつての蕎麦切り。即座の口あたりを味わう蕎麦は、いくら粉がよくつても、ぽつぽつ箸でつまむようなのはいただけない。

風呂屋の番台みたいな帳場、記憶に残るその蕎麦屋もいまはない。それからの私は、「並木の藪」か「十和田」の客だ。

観音さまの境内から、隅田川のほとり、むかしの大川端に出る。

水上バスの客でにぎわう吾妻橋。これより上、夫婦和合、二股大根の待乳山聖天では正月二十日に、風呂吹き大根を振舞う大根祭がある。さらに、私らその歳ごろにはすでに遊廓の灯消えていた新吉原（ついてない青春のこと、いまは言うまい）、近くには「お酉さま」の鷺神社。私は中学のころから、午前零時の太鼓を合図に酉の市の参詣済ませると、旅仕度にかかるようになっていた。

両国国技館と江戸東京博物館



終戦もない生まれのくせに、「ピカドンで焼け爛れた空の熟柿色」などとはざいて、気狂い呼ばわりされた少年には、放浪の慰めがたまに必要だった。師走の慌しさは好きだけれど、クリ

スマスの身に染みて哀しいのが嫌で、ジングルベルの聞こえない町にさすらう。いまじやもう、とても無理だが、そのころはまだ、ジングルベルにかき乱されない町があった。そうして、暮れもおしつまって家に帰ると、ホツとした……。

墨堤を行く。春は、

桜。「長命寺の桜餅」の、塩漬け桜葉で飲むビールのうまさを、ごぞんじだろうか。ほろ酔って、「駒形のどぜう」でさらに、酔いを深くする。

春はそれでよい、が、いまは季節も刻限もときにあらず。冬の「どぜう」は、日暮れて体の冷えかかってからだ。

減びの美

私は肩の雑囊から、草履を出して履きかえる。なれない足が痛んだ。下駄の歯も、わずかなあいだにひどく痛んで見えた。いまの東京、下駄で歩く道はない。ただ、自然ゆるやかになる下駄の歩速は、うれしい感覚として足裏に残った。

汚れちまった隅田の流れも、痛まし



い。思慕の情のかけらもない護岸で殺された水を見れば、清流復活のきざし……なんぞ、なにを戯言^{たわごと}だ。リバーサイドパークとやという厚化粧の隙間に、浮浪者^{みれす}が段ボールと板切れて家を造って

棲んでいる。しゃがんで潜りこむほどの小ささだが、二間と、窓にはカーテンまである。「うまいもんだねえ」と誉めたら、まんざらでもなさそうに腕をさすって、なんだか妙な気分だった。厩橋^{うまや}、蔵前橋から両国橋……。

私は（下駄で歩く下町、か）と、呟いてみる。悪くない。が、私はそれに（東京減びゆくま）と、副題をつけたかった。

池波正太郎『江戸古地図散歩』（平凡社カラー新書）という本がある。副題は、回想の下町。このなかで氏は、『災害の都市』江戸そして東京に触れ、へ町の姿が激しく変わるのも当然であろう。火災に焼かれ、戦争に灰となり、いまは公害によって苦しめられる。な



深川、芭蕉記念館

んという、わが故郷なのか……」と。

私には、その災害のたびに遅しく復興してきたかに見える江戸・東京が、滅びの美の花火を打ち上げているのだと想える。

惜しいと思う、けれども滅びていくしかない東京の美を、見つめていこうと思う。

池波氏は、へ日本の大都市の中で東京ほど、他国の政治家や実業家に喰い荒された都市はあるまい」と嘆いた。私はそれを、東京という町の歴史的な成り立ちからして(惜しいかな、やむをえない)と思う。だから東京人は、京都人や大阪人のようには、わが町を誇りきれないところがある。

「いなせ」な男、女の「なさけ」……い

ろいろにいわれる江戸っ子の美德の、なかでもいちばんは「いさぎよさ」だと、私は思う。潔く、滅びの美を見つめよう、と。ただ、律儀がときに悪いくせにもなる、「早手まわし」にせかせかと、滅びの美を追求してほしくはないのだった。

両国の国技館の奥には、去年、満都の話題をさらった江戸東京博物館。一見しておくのは話のたねによからう、だけど私や好かない。

ごてごてとこさえずぎて、「いさぎよさ」微塵もない。建物もだめだ。だいたい近ごろの、住む人、利用する者のことなんかどうでもいい、ご大層な建築家なんて輩の所業が胡散臭くて鼻もちならない。それでいて、ガウデ

深川の堀川 大横川



イのように突き抜けもしなけりや、これっぽちの謙遜もないのだ。それを、ありがたがるほうも、どうかしてる。

江戸情緒なら、断然江戸川区の深川江戸資料館のほうが上。清澄庭園にほど近く、狭つくるところだが、そこが下町。地下一階から地上二階までの吹き抜けに、天保年間深川界隈の町並みの一郭を再現して見せる。

油問屋に八百屋に米屋、白壁の土蔵、船宿前の掘割にや猪牙舟、町木戸の外に火の見櫓、路地裏に入れば奉公人や職人たちの長屋、常磐津の女師匠の家の屋根には猫が眠る。

映画のセットみたいなものだか……「あつさりーッ、しじみヨースッ」、棒手振りの呼び声と時刻を告げる鶏鳴で夜

が明け、犬の遠吠えとともに日の暮れるまでを、音響と照明で演出。「まあ、おあがりな」という姿勢の触れる展示で、いまは東京の町から失われた生きた音声、闇と灯り、そして匂いまでも想い出させてくれるのだ。

この道筋、両国から門前仲町にかけては、回向院、吉良邸跡の松坂町公園、時津風・出羽ノ海・立浪・井筒ほかの相撲部屋、芭蕉記念館、深川不動、富岡八幡など。途中、小名木川や仙台堀川といった堀川に架かる橋を渡って、なかなかに楽しい。それにこのあたり、まだ建物が低い分空が大きいから、ぶらり散歩の気も晴れてよい。

例えば「そのへんをぶらつとしてくる」のが、江戸っ子庶民の娯楽。懐に



ゆとりがあれば、どこかで何か食べる
か飲むかする。

私はこの日、森下のけとばし屋「み
の家」で桜鍋と馬刺で一杯。久し振りに、
月代の剃りあと青い「いなせ」な
若い衆と、連れの「お俠」な安産腰の

娘と、ぼんぼんはずむ世間話をしたら、
（このままじゃ帰れない）気分になっ
てきた。

もいちど下駄に履きかえて、（おし、
もういつちよ）。両国にもどって、「桔
梗家」のどぜう丸鍋で杯をかさねる。

すると、五つくらいのがきのころ、は
じめてのどぜう屋の丸のどぜう汁に、
不覚の涙流したことが、ふと思い出さ
れた。ナゼもヘチマもない、泥鰌は遊
び友だちだった……。

見ず知らずの客が、（坊や、男だ）、そ
ういつて猪口をくれた。燗酒に噎せ、し
かし、こらえた涙ほど苦くはなかった。
以来私は、どぜうは「丸」でいただ
く。粹がるわけじゃないが、男が「ほ
ねぬき」じゃみつともねえや……。

午後の

日差しの中で

〈最終回〉

言葉の力

吉川英明

(作家)

「ゆうべはどこにいたの?」

「そんな昔のことは忘れたよ」

「今晚また会えるの?」

「そんな先のことはわからない」

随分気障な会話だが、気がついた方もあるだろう。そう、往年の名画『カサブランカ』の中



の、ハンフリー・ボガードとイングリッド・バーグマンのやりとりである。

私自身、この映画を見たのはもうずっと昔で、有名なこの台詞も忘れていたのだが、先日『カサブランカ』の脚本を書いたハワード・コッチという人の記事が新聞に出ていて、この会話が

引用されていたので思い出したのだ。

そして、ぼんやりと、その場面を思い出しな
がら、

（日本人には言えないなあ）
と思った。

実生活で、女からの問いかけに対して、こ
う答えを返す男はいるかもしれないが、映画
や小説の中で日本人の主人公にこの手の台詞を
言わせるのは、かなり勇気がいる。

ハンフリー・ボガードのしかめ面が、もぐも
ぐと口の中でこれを言うとき、凄く絵になり、洒
落た文句に聞こえるのだが、日本人にしゃべら
せたら気障すぎて絵空事か、ひねくれ者の拗ね
た返事に聞こえてしまう。

日本語の日常の会話には、こうした洒落たニ
ュアンスとか遊びとかいうものが欠けているの

だ。曖昧さは多分に持ちながら、何となく固い。

どこか生真面目なのである。

愛情を表現する口語も少ない。

英語では、いく普通の表現である「I LOVE
YOU」にあたるすっきりした表現すらないのだ。

「愛してる」というのは、少なくとも私ぐらい
の年代にとっては、洋画や歌の世界の言葉であ
って、実際の口語として生きているとはとても
言えない。芝居がかっているように感じてしま
う。

「好きだよ」というのも、何となく子供っぽい
し、単に好きであることと、愛することとは本
来次元の違う感情だろう。

適当な言葉がないから、自然自分の気持を婉
曲に表現することになる。中年から初老の男を
主人公に恋愛小説を書く時、困ることでもあり、
工夫のしがいのある点でもある。

午後の

日差しの中で

ただ、その場合でも、さつきも言ったように日本人の会話が生真面目に過ぎるため、一つ間違えると、洒落ているどころか齒の浮くような台詞になってしまう。名台詞を吐いたり、書いたりするのが難しい所以である。

これはまた、日本人が概して照れ屋であるということと無縁ではないだろう。

欧米の映画で、結婚後何年も経った夫婦が、愛してるだの、お前が必要だのと言い合っている場面を見ると、いつものことながら、随分違うなと思うてしまう。

日本人の、特に夫たちは、どんなに妻を愛しているかが、感謝しているかが、面と向かつては口に出せない。照れ臭いのだ。言えないだけならまだいい。照れを隠すため、逆に突っけんどんな口を利いたり、邪険に扱ったりする。

だが、女性は言葉が欲しいらしい。相手の気

持ちはわかっていても、最終的には、証しとしての言葉が必要なのだ。口に出して言われると、真心を見た気がするのだろう。

落語にも、女房に晩酌の酒を買い足しに行かせた飲兵衛の亭主が、飲みながら日頃の感謝や思いを独りごち、まだ出掛けていなかった女房に全部聞かれてしまうという話がある。

それまでの乱暴な物言いから、てっきり女房が出掛けたと思って、

「ああ、ありがてえ、ありがてえ」

と、酔っぱらいのしんみりとした独白に変わる。涙を^{はな}吸りながら吐露する飲兵衛亭主の真情に、聞く者の心をはのぼのとさせるのが聞かせどころだ。

離婚した私に、これを言う資格があるとは思わないが、夫が妻に対して、もつと率直に感謝や愛を表現すれば、夫婦の危機の何割かは救え

るのではないかと思う。言葉は、それほど強いのだ。

ところで、最近電車の中などで、周囲の眼も気にせず、べたべたとくっついていて若いカップルを時々見掛ける。

年配の人は、あからさまに顔をしかめるが、若い人たちはあまり気にしないようだ。

私ぐらいの年齢層の眼にも、あまり見よい図とは映らないが、あれを見ていて、ふと考えてしまうことがある。

彼らの言葉はどうなっているのだろうかというのだ。

あれだけ臆面もなく、公共の場で愛情を表現し合っているのだから、我々の世代のように、愛の言葉に不自由するとか照れるとかいうことはないだろうなと思うのだ。



愛するという言葉を使うのだろうか、好きという言葉で済ますのだろうか。または、もっと新しい愛の言葉を囁くのだろうか……傍へ行って立ち聞きするわけにはいかないからわからないが、その辺が気になる。

身体さえあれば言葉は要らないというのなら論外だが、異性に対して大胆で率直な世代が育つていくと、日本語にも、適切な愛情表現の言葉が定着するかもしれないと期待もするのだ。

だが、ああいうカップルが結婚して十年、二十年と経った時、果たしてお互いに、恋愛時代と同じ言葉で気持ちを表せるだろうか。そう考えると、どうかたと首を捻ってしまう。その辺の民族の特質のようなものは、中々変わらないのではないかと思うのだ。

反面、人を傷つける毒のある言葉なら、日本語にもいくらでもある。

小中学生の間で増えている「いじめ」でも、言葉によるダメージが、暴力や嫌がらせの行為以上に大きいという。

「死ぬ」という直接的なものから、「臭い」とか「汚い」という、大人でも言われれば傷つくような言葉を、連日浴びせられながら孤立すれば、感じやすい年頃の子供なら、死を考えるのもわかる気がする。これほど残酷なことはないと思う。

我々の小中学生時代にはなかった集団による「いじめ」という陰湿な行為が表面化してからもう久しい。

何故こんなことが、学校の中で野放し同然になっているのだろう。学校の休みを二日にしたところで「いじめ」はなくなりはない。休みなんかを論ずる前に何とかしなければならぬ問題だ。

ちよつと話が横道にそれた。

こうした、明らかに人を傷つけようと意図した言葉の威力には凄いものがあるが、まったくそれとは意図せずに発せられた言葉を、受け取るほうが悪く取って傷ついてしまうというのもよくある例だ。

先日、定年退職後の夫が、妻に言われて傷つく言葉というのが新聞に載っていたが、いくつか挙げられた言葉の中で、

「これから、仕事どうするの?」

というのが目についた。

「どこかへ出掛けて」とか「邪魔だ」というのは、言っているほうも受け取るほうも額面通りで変哲がないのだが、この「これから仕事どうするの?」という言葉には、言われたほうが傷つくほど、言ったほうでは非難めいた感情を込めてい

ない場合もあるだろうと思ったのだ。

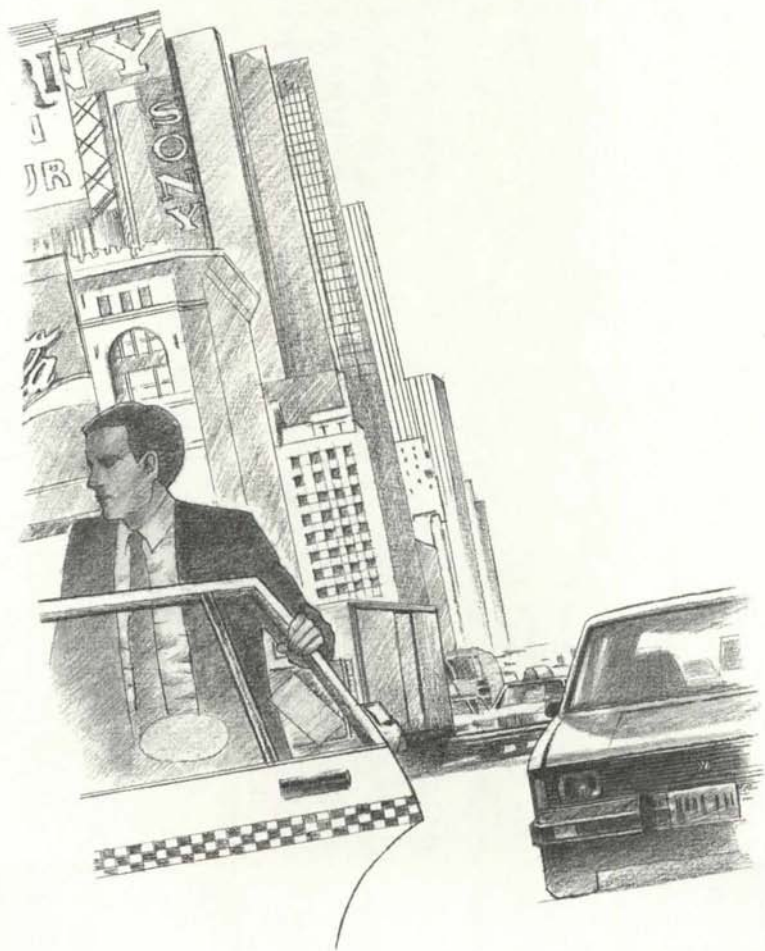
もちろん、早急に仕事を見つけないければ、今後の生活が立ち行かないという場合もあるだろうし、そういう事情なら、言われたほうの心が痛むというのはよくわかる。

しかし、この言葉がアンケート結果の上位十位に入ってくるということは、かなり多くの一般的な家庭で、妻が不用意にそう言い、それに夫が傷ついているということだ。

妻は、恐らく、本当に何の気なしに、これからどうするのかなと思っただけなのだ。それを、言われた夫のほうでは、

(一生懸命、何十年働いて来たのに、また仕事のことを言いやがる。なんて一言、ご苦労様でしたと言えねえんだ。この女)

とても言う気持ちなのだ。かっと頭に來た言葉として記憶に残り、アンケートに答えたのだろ



う。

まさに、言葉の行き違いだ、何十年連れ添った夫婦にしてこれである。

ちよっとした言い方、あるいは前後の言葉で、受け取り方は随分変わる。

これも新聞の投書だが、定年退職した夫に投書の主が、

「これから、何を大切にして生きていくの？」と訊いたら、

「もちろん、お母さんさ」

という答えが帰って来て、どぎまぎしてしまっただという。お母さんというのは自分のことなのだ。だが、いつもは自分を名前で呼ぶ夫が「お母さん」と言ったことに、夫の照れを感じて微笑ましかったと投書は結んであった。

投書には喜びがこもっており、読んでいるほ

うも、行間からこの夫婦の幸せな老後が見えるような気がして、気持ちがあくなくなった。

こういう言葉を、さりとてのけられる夫は素晴らしい。

私事で恐縮だが、私の母は、二度にわたる肺癌の手術で入院している父に付き添っていたある晩、父から、

「お前に巡り合ったことに、僕は神の恵みを感じるよ」

と言われたという。

父にしても、死が遠くないことを覚り、これまでの人生を振り返って、最大級の感謝の言葉が口を突いたのだろう。この世に残る妻への最高の贈り物だと思う。母も、この一言ですべてが報われた気がしたに違いない。

言葉にはとてつもない力がある、と思う。

午後の

日差しの中で

(了)

楽屋ゆかた

その四

中村吉之丞(四)

この項最終回

関 容子

イラストレーション＝田村直巳



吉之丞は、終戦の年には十三歳の食べざかりだった。そのころの食べ物の苦労話を始めると、今でも切実な感じになる。

「帝劇の菊吉合同で芝居してるとき、母が来て言うんです。『お前ね、何にも食べる物がなくなっちゃったんだよ』って。そうしたら売店のおばさんがわざわざ家まで行って白米を五合持つてきてくれたんです。押しいただいて帰って、その五合を一週間、母と二人で食べましたよ。

さつまいもやかぼちやや大根を入れた雑炊おじやにして。そんなころに、ある日先の旦那せん（初代吉右衛門）の楽屋とこみへお客さんきやくさんがお寿司を一人前届けてきたんです。あたしが次部屋つぎべやに控えていると、旦那が『オイオイ』って呼ぶんです。『おめえにこれやるから食いねえ』って、お寿司を三つ、くれたんですよ。手のひらに載った三つのお寿司が宝石みたいに見えました。これ一つ、おっかさんに食べさせてやりたいなあ、と思って、じー

つと見つめていたんです。そしたら旦那が『もらった物はすぐその場で食べなくちゃ失礼に当たるよ』って。『すみません、いただきます』って食べましたけどね。今も忘れられません』

帝劇のそのときの出し物は「大寺学校」と「高時」で、吉之丞は子供なので「高時」に出る犬の役だった。増長しているお犬様は、勘三郎扮する安達の鉄扇ですぐに殴り殺されてしまう。

「中村屋さんが、『お前一緒に写真撮んだよ』って、写真を撮りましたですよ」

あのころ食べ物で苦労したのはお弟子たちばかりではなかったという。初代吉右衛門は、当時久我山に住んでいた。

「旦那の家のお隣りの庭にたくさん竹があつて、塀のこっちに竹の子が首を出しますでしょ。すると坊ちゃん（現吉右衛門）が喜んで、小さいから騒ぐんです。すると隣りが塀側の竹の根を切

っちゃうんですよ。向こうの竹の子の出が悪くなるからでしょうね。それで折角首出した竹の子が大きくならない。坊ちゃんはばあば（ばあや）に『シツ、言っちゃダメ』とでも言われたんでしょかね。ある日、あたしがお供して井の頭線で渋谷へ出て芝居へ行く途中、窓から見てたら農家の庭先に竹の子が一杯出てるんですよ。

『坊ちゃん、御覧なさい、あんなに竹の子が』って言ったら『シーツ、静かにしないと根エ切られちゃうのよ』（笑）」

昭和二十七年一月、二十歳で名題昇進、吉三から万之丞となる。初代吉右衛門の「松浦の太鼓」序幕の両国橋の場に、茶店の女の役をつけ足してもらって名題披露とした。

「序幕の幕切れ近く、茶店の女はせりふを控え目に言つてスツと引っこまなきやいけないのに、『何が何して……』ポン、と足を出して決めた

ら、『おい、役にしちやいけねえ』って旦那に叱られました。そういうふうにしていいのは、重い役に限るのに、恥かしかったです」

しかし吉之丞は、万之丞時代もどんどん大きな役に抜擢されて行く。特に現幸四郎・吉右衛門兄弟の勉強会「木の芽会」では、いつも重い役をつとめた。

「今の旦那（吉右衛門）の団七（『夏祭浪花鑑』）で女房お梶をやらせていただいたときです。あれはあたしの次男が四つ五つのところで、正子奥様（白鸚夫人）が、『出しなさいよ』って言うってくださるので、『出るかい？』って訊いたら『ウン』。それで団七の伴に出していただいて、旦那におんぶされて花道引っこんだり、御褒美に旦那がゲッターロボの大きなのを買ってくださったりしたんですが、もうそれっきり、出るとは申しません。ちょうどそのとき齒がはれてたのに髪キュ

ッキュツと入れられて、痛かったんでしよう。それでこりたらしいんですが、あたしもよくよく考えれば、こういうことはあたし一代でたくさんだと思ひましてね。好きでなきやとてまやつて行けません。何の世界も同じでしょうけれど。靴磨きしてでもいいから役者やめよう、と思ったこともたびたびありました。考えてみりゃくだらないことで悩んでるわけですがね。何やつても二六時中いいことばかりはない。お天気と同じなんですよ、あたしは気が小さいほうなので、嵐がくると押しつぶされそうになるんです」

楽屋に吉之丞夫人の昭美さんが顔を出した。襲名の月なので、挨拶やら何やらいろいろ用が多いのだろう。

「この人とは先代の吉之丞さんの御縁で一緒になったんです。思えば不思議な因縁ですね。その名をあたしが今こうして継ぐことになるなんて……」

吉之丞と昭美さんが交互に話してくれたことによると、何十年前か前、先代吉之丞の娘に当たる人が九段で置き屋（芸者屋）を営んでいた。その向かい側にあった富士乃家という置き屋が昭美

「親一人子一人であたしを育てた母ですからね。男まさりの気の強い人で、あたしが旅（興行）にでも出てしまったあとは大変だったと思いますよ。いったんこうと決めると『そうじゃない



昭和27年1月、万之丞名題 襲名披露は「松浦の太鼓」の茶屋の娘役。

さんの叔母の家で、そこに時折出入りする娘は気立てがよさそう、という話が現吉之丞の母の耳に入り、夫の母親に強く望まれて昭美さんはお嫁に来た。

んだから母さん『ついてくら言っても、決して『そうかい』とは言わない人でしたからね』
「とにかく親孝行な人ですから」
と昭美さんが笑う。

その母親も八年前に亡くなった。吉之丞襲名の話が決まったとき、孝行な吉之丞は、真つ先に静岡にある母の墓前に報告に行ったという。

さて、吉之丞襲名の九月も無事終る。「引窓」の吉之丞の母お幸の役を何度か見たが、老母が我が子の濡髪の堂々とした後ろ姿に見惚れて、相撲取りの肩を揺らした歩きぶりを真似るところ。私はあの件りが大好きで楽しみにしていたが、吉之丞はそれをせず「立派なものやなあ」とだけ言う。

「あれは先代の（上村）吉弥さんがなさったことですが、あの方は寸法（背丈）がいいですからね。あたしは大きいものですから、背を盗んだり縮めたり、いつも苦勞しますけど、下手に真似をしてる濡髪より婆アのほうが大きくなつてしまつてはね（笑）。これから老けのお役が増

えるでしょうが、もう少し体が小さいとよかつたんですけどねえ……」

昔、先代猿之助（猿翁）が、「（その背丈を）買えるものなら買ってやりたい」と言つたという。そして十月。名古屋御園座、吉右衛門の「籠釣瓶」で、吉之丞は立花屋女房おきつをつとめて襲名披露狂言とした。

十一月は国立劇場、やはり吉右衛門の「毛剃」で、吉之丞は奥田屋女房お松をつとめた。お松は二幕目奥田屋店先と奥座敷が活躍の場。幕切れ。二千四百五十両で小女郎以下七人の身請けをした花道の毛剃九右衛門と、本舞台のお松とが堂々と渡り合い、吉之丞がいい味を見せた。やはりこういう粹な役柄では、スラリとした姿のよさが強みだろう。

国立劇場の吉之丞の楽屋は、広々として明るかつた。楽屋ゆかたに着かえて化粧を落とそう

としているときに、のれんを分けて中をうかがっている人影が鏡の中に見え、吉之丞が振り向いた。その客は役者をやめて、今はある役者の番頭になっている、とあとから吉之丞に聞いた。

と褒め上げ、そつと片手を上に向けて畳の上を滑らすと、

「(御祝儀) いただきたいねえ」

とにつこりした。あんまり褒めすぎて照れたの



「政子と頼朝」で政子の妹、牧子を演ずる万之丞。
これも万之丞襲名直後だった。

「よかつたわよ、奥田屋女房、大したものだわ」
やっぱり元女房だった人だろう。

「あの幕切れの気の使い方はすごいわ。貫禄があるし、舞台は大きいし……」

だろう。吉之丞はハツと気づいて空っぽの手で畳を撫ぜると、

「(あたしも) 出したいねえ」

とあてやかに笑う。

(エッセイスト)

平和を祈って 東京を歩く

取材・文 稲葉小太郎

ぼくが森下行哲さんと最初に会ったのは四年前、一九九一年の一月のこと。日本山妙法寺の僧侶が湾岸紛争の平和的な解決を求めて、断食をしていたときだった。延三十二日間の断食をなしとげた大津行秀さんについては『コンビニ



ちりした・ぎょうてつ●一九三七年佐賀県の日蓮宗の布教所で生まれる。戦後日本山妙法寺に改宗。世界各地を題目を唱え太鼓を叩いて歩いたあと、93年5月から「自衛隊の海外遣兵反対」を唱えて毎日、東京を行脚している。

エンス・マインド』（大蔵出版刊）の中で書いたのだが、二十一日間の断食のあと用事があつてインドへ向かった森下さんについても、とても印象深く覚えている。朝は零度近くになる渋谷の街頭で、五十歳を超えた森下さんは薄い衣一枚に裸足で、トイレにも立たずに座り続けていたからだ。

二度目の出会いは、一昨年の冬。これもたまたま桜田門のところを歩いているとき、遠くから太鼓の音が聞こえた。もしやと思つて音をたどつて国会議事堂へ行くと、大津さんと森下さん、釘宮海証さんの三人が座り込んで断食をしていた。今度は自衛隊の海外派兵に反対して、無期限の断食をしているという。このときの断食は延四十四日間続いた。

三度目の出会いは昨年の夏。ぼくの家は靖国通りから少し入ったところにあるのだが、ある

時間になると、

ドン、ドン、ドン、

という音が聞こえるようになった。最初は工事かなと思つていたのだが、息子を幼稚園に迎えに行った帰り、黄色い袈裟を着たお坊さんが太鼓を叩きながら歩いているのに出会った。森下さんだった。今度は「PKO反対」「自衛隊法改悪反対」のために、毎日東京を歩いているという。

皇居のほうへ去っていく森下さんの後ろ姿を見ながら、「行者」という言葉が頭に浮かんだ。なぜこんなに偶然の出会いが重なるのだろうか。不思議といえば不思議だ。寡黙な森下さんとは今までゆっくり話したことはなかったが、なんとしても森下さんのことを聞いてみたくなつた。

そのためにまず一日だけ、森下さんと一緒に東京を歩かせてもらった。スペースの関係もあ

るので詳しくは別の機会に書きたいのだが、渋谷・青山・市ヶ谷の自衛隊駐屯地、皇居を経て国会議事堂へ至り、さらに溜池、六本木の防衛庁の前でお祈りして、青山、渋谷と帰っていった。太鼓を叩きながら、声のかぎりに題目を唱えて歩いた一日は、とても特別な体験だった。次の日は足首がずきずきと痛んで、歩くのが大変だった。これをもう一年半も続けている森下さんとは、どんなひとなのだろうか。

題目が子守歌

森下さんの主張することは、「反戦」「平和」のふたつにつきる。このような考えに至った軌跡をたどってみよう。

森下行哲さんは昭和十二年、佐賀県東松浦郡鎮西町名護屋にある日蓮宗の小さな布教所に、四人兄弟の長男として生まれた。

父の名は是名。福井県出身の日蓮宗の僧侶だ。身延山の祖山学院を卒業し、大陸開教を志して九州に赴き、縁あって唐津大乘寺の末寺を引き継ぐことになった。

小さな寺ながら、母は毎朝枕元で太鼓を叩いてお勤めをするほど熱心な信仰を持っていた。森下さんも題目を子守歌のように聞いて育つ。数えて五歳のころには、親に連れられて太鼓を叩いて街頭を歩いていた。

森下さんの最初の記憶は戦争と結びついている。母親の背中におぶさって万歳山というところまで兵隊さんを見送りにいったのだ。

戦争中は遠くの空が焼夷弾で赤く染まるのを何度も見た。国内に残った軍人が寺や学校に住んでいて、朝の訓練をするのを見ていた。そこへ空襲があり、十四、五人の死体が並べられているのを見た。

地元の一般人が傷つくことはなかったが、戦時中に太砲の弾にするために梵鐘や蠟燭立てはすべて供出させられた。

昭和十九年、小学校の一年生のころには、戦死者の合同葬儀の際、校長や先生、生徒が最敬礼する中を、森下少年は遺族の先頭に立って校門から入っていくこともあった。

だが、森下さんが戦争のほんとうの悲惨さに気がつくのは、終戦後しばらくたってからのことだ。

原爆の恐ろしさと罪を知る

終戦直後の昭和二十二年、森下さんが生まれた寺が日本山妙法寺に改宗する。日本山妙法寺のこと、宗祖の藤井日達上人のことを聞き、反戦平和の生き方に共鳴した父が、日本山妙法寺へと宗旨を変えたのだ。

小さい布教所とはいえ宗派が変わるというのは大変だった。本山から自分ひとり出ていくのだ。母親だって小さな子ども四人の面倒を見るのは大変だ。二月も三月も壇家総代を集めて話し合ったのち、最終的には母の意見によって、日本山妙法寺に改宗することが決まった。

その後父とともに、熊本県花岡に仏舍利塔を立てる準備をしていた藤井日達上人のもとへ行き、経文の勉強をする。初めて母親と別れてお寺の生活に入ったのだ。父は半年で帰ったが、森下さんは大勢の若いお坊さんと修行した。太鼓を叩きながら、焼け野原となった町の中を歩いた。

終戦後二年も立っているのに、駅には屋根もない。瓦礫の山にかぼちゃのつるが繁って、その下に石や煉瓦を積んで小さな穴蔵みたいなところに人々が住んでいた。たくさんの戦災孤児

が、あちこちにたむろしていて、森下少年に食べ物^{モノ}をねだ^{ねだ}ったりした。

その中を毎日、街頭へ出て修行をする。ジープに乗った進駐軍が、太鼓を取り上げていたずらすることもあった。

中学校のときにいったん名護屋へ帰ったのだが、半分は学校、半分は父親の代理で題目講や御回向^{ごかいこう}へでかけた。太鼓と座布団を持って学校から直接信者さんの家へ行き一晩泊^{とまり}って、そこで弁当^{べんとう}をもらって学校へ行く。

壇家の誰かが亡くなったら、夜中でも枕経^{まくらぎ}に行く。帰^{かえ}りもひとりだ。

子どもだからいつも機嫌^{きげん}がいいとは限らない。母親になだめられたり、すかされたり行く日もあった。

中学を卒業して長崎の諫早のお寺へ行つたとき、長崎の原爆の被災者に会い、大きなシヨツ

クを受けた。

御回向^{ごかいこう}に行った家で、からだも顔もケロイドでめちやめちやになった女性が、外出することもできないでひっそりと暮らしている。その女性には乳飲み子がいるのだが、火傷で両方の乳房^{ちち}を失^うってしまった。

「柔^ならかいおっぱいを触^ふることができない赤ちゃんが、将来どんな子どもになるのか心配で……」
まだ二十歳そこそこの森下さんは、なんと答えていいのかわからなかった。

そうした悲慘^{ひさん}を目にするにつれ、そして藤井日達上人や、上人と親交のあったインドのガンジ^{ガンジ}ーの話^{はなし}を耳にするにつれ、だんだんと戦争の罪悪^{ざいあく}が実感^{じつかん}できるようになったという。

九年間の海外放浪

初めて海外に出たのは一九六九年（昭和四十



森下さんは太鼓をたたきながら、東京を歩く。

四年)。清澄山の仏舎利塔建立に従事した御褒美として、ラージヤグリハ（王舎城）の仏舎利塔の落慶法要に出席した。

翌年は羽田から飛行機でインドへ。アシヨカ王が改宗した地として有名なオリッサでの仏舎利塔の工事を手伝った。その後二年間ボンベイの寺にいたのち、インド政府から追放されてネパールへ向かう。ネパールに一年半ほどいて、再び国王の命令で追い出され、ヨーロッパへ。

ヨーロッパではまずパリに三カ月くらいいて、ロンドンで一年半、仏舎利塔の建立を手伝う。その後はナミビアへ向かう黒人解放グループとともに船でアフリカへ渡る。

帰国したのが七九年だから、丸九年間外国で修行していたことになる。

その間は常に太鼓を叩いて街頭修行。仏舎利塔の工事をやっているときは鉄筋やらコンクリ

ートやら運んでいるのだが、それ以外はずっと太鼓叩いて修行していた。船の中でも朝晩修行。港にいったら船から降りて町を歩く。

森下さんの荷物は太鼓と着替えと藤井日達上人の書物が少し。ほかになんにもない。

そのあいだの生活費はどうしていたのだろうか？

「考えたことはないですね。行った先々で隣のひとが食事を半分くれたり、別のひとが寝床を半分開けてくれたり。その場その場で誰かが助けてくれました」

アフリカのセネガルでは百数十日の間、毎日違う家に泊めてもらった。相手はイスラム教徒だし言葉もまったく通じないのだが、太鼓を叩いてお祈りしている姿を見ればわかるのだろう。食事をくれ、翌日には弁当作ってくれるところもあった。

ところがアフリカで街頭修行を始めて百日を越えたあたり、マラリアに罹ってしまう。まず最初に食べたものをぜんぶ吐いた。熱にうかされて夜も昼もわからない日が続く。病院で注射を打ってもよくならない。結局、セネガルの日本大使館に車で連れていってもらい、一月以上、大使の家に滞在した。

そのとき、自分が死ぬことも考えた。

「考えましたね。自分の死を想像しました。ベツドでハンカチを顔にかぶせて……そういう状態になるのかなあ、と」

怖いという感じは？

「怖いというより、自分の荷物とか身の回りをきちんとしましたね。あとを見られても、見苦しくないように」

不思議なほど、淡々としたものである。

「大変な思いをしますけど、法華經を行ずる人

があるいは女となり、あるいは子どもとなり、法師を供養するという経文があるでしょう。それを信じるようになりましたね。行く先々で誰かが助けてくれる。最近は、みんな仏さまが遭わしてくれるのだと思っています」

八二年の軍縮総会のときはサンフランシスコ・ニューヨークを歩いた。戦争が仏さまのところに反するということがわかるにつれ、森下さんの活動は反戦平和のことに収斂されていく。

一九九〇年八月に始まる湾岸戦争のとき、インドのダージリンで新聞を見ていて自衛隊が海外に出るといふ動きがあると知る。急遽帰国して大津行秀さんと、渋谷のハチ公前で断食に入った。それから日本にとどまって、PKOの問題、自衛隊の海外派兵の問題を専門的に祈念するようにになったのだ。

仏法は体、衆生は影

今回の街頭修行を始めたのは、去年の五月。ちょうどPKO法案が国会で成立した直後からだ。そのあと衆議院選挙の間はしばらく中断し、細川護熙首相が誕生してから再び歩き始めた。すでに四人の首相を相手に祈念していることになる。

森下さんが肩から下げている袋には、

「自衛隊法 改悪反対」

と書いた布が縫いつけてある。これから寒くなるというのに身に着けているのは薄い衣一枚。足は裸足でゴムのサンダルを履いただけだ。

街を歩いているときは、どのようなことを考えているのだろうか。

「やっぱり、戦争なんか二度と起こしてはいけないということを祈っています。私もアフリカやヨーロッパを歩いたときに、昔、兵隊さんが



「
どう
いう
思い
をし
てき
たか
わか
った
から
ね」
灼熱
のア
フリ
カで
脱水
状態
にな
り、
泥水
をす
す
った
とき
には、
南方
のジ
ヤン
グル
に迷
い込
ん

だ兵
士の
気持
ちが
わか
る。あ
るい
は零
下数
十度
のヨ
ーロ
ッパ
を通
り越
して
くれ
ば、
シベ
リア
の抑
留者
のこ
とが
わか
る。



「そういうことを通して、戦争がいかに馬鹿らしいものかわかってくる。宗教家として、このまま見過ごすわけにはいかないという思いです」

仏教は体のごとし、衆生は影のごとし、という経文がある。仏法が正しく世間に行なわれるようになれば、世間はよくなる。政治が悪い、という前に、仏さまの教えを求めていけば、自然と世間もついてくる。まずはお坊さんが道を求めて修行していく、これが先決だと思うようになった。

「私自身が仏道修行にはげむこと。これ以外に世界の平和なものもないんです」

第二次大戦でも、最初は日本山妙法寺のお坊さんが満州人に殺された。そこで、日本人が殺されたといつて一気に日本軍が進駐して上海事変が起ったのだが、森下さんによればそれは口実を作るために日本軍が金を出して、殺させ

たのだという。

なんの罪もないひとが犠牲になる。最初は邦人救出と言っているけど、そのうちだんだんエスカレートしてくるし、救出しなければいけないというよりも、そういう目に会わない社会を作るのが先でしょう。

みんな、邦人救出という表面のいいところだけしか見ない、という。

自衛隊の海外派兵の、法案はつい先日、国会を通過した。防衛庁の前で御修行していると、どんどん新しい車も入ってくる。戦争の危機を感じないではいられない。

「仏教徒が一致団結して非暴力を原則とする政治に変えていかないといけません」

この街頭修行は三年間続けるつもりだから、今はちょうど半ばになる。政治のことを考えると頭にきてしょうがないけれど、太鼓を叩いて

いるとそれも自然とやわらいでくるといふ。故郷の村で太鼓を叩いて歩いたあのころに、いつのまにか気持ちいもどっている。その姿を見て、子どもたちが寄ってくる。

「頑張ってください」

声をかけていく子どももいる。

「太鼓の音はうるさいかもしれないけど、ふと仏さまに目覚めるときがきます。ひとりずつでも、気づいていけば世の中は変わる。そう信じています」

身を焼いて供養する

ところで森下さんの両腕の上腕には、大きな火傷の跡がある。法華経薬王菩薩本尊品のなかにある「焼身焼腎供養」にならって、線香の火で焼いたのだ。

二十歳のころ、九州の諫早にいたときのこと

だ。線香一束に火をつけ、糸で腕にしばりつけ、ずつと焼いていく。火が燃え上がることはなく、じゅーつと脂が出てくる。

全部燃えるのに一時間かかる。片腕が終わったら二日後にもう片方の腕。さらに二、三日してから両方の足を同時に焼いた。

修行とはいえ、自分のからだを焼くというのはどんな気持ちができるものかと聞くと、

「一生懸命だからね。お題目唱えながら焼いていくんだから、ほんとの真剣」

と答えた。信仰の力というのは、とんでもないことを可能にするのだなあとと思う。

現代の日本においては、森下さんや日本山妙法寺の僧侶たちの活動は少数派なのかもしれない。しかし少しでも多くの人に、こういうお坊さんにもいるんだということを、知ってもらいたいと思う。

念仏信仰の系譜

6

中國編

善導教学の特色

前述した善導大師の安心・起行・作業の教えの中に、大切な大師の主張が藏されております。初めの安心ですが、その深心は凡夫の私を阿弥陀仏は必ず救ってくださると深く信ずること、まず第一に、自分は凡夫だとの自覚がなければなりません。次に救済主としての阿弥陀仏の尊さを知ることです。大師は人間はみな凡夫であ



須藤隆仙

イラストレーション—小菅 遼

るとの自覚を教えられ、その凡夫が最高の仏の世界（極楽。これを報土という）に往生できるのだと主張されました。これこそ前述した古今楷定であって、それまでは凡夫は報土に往生できないとの説が多かったのです。大師はこれを正されました。法然上人はこれを受けて、「われ浄土宗を立つる心は、凡夫の報土に生まるることを示さんためなり」と仰せられたのであります。また、廻向ということについては、浄土

へ往くためにだけ信心行を廻向ける（往相廻向という）のではなく、浄土に生まれたら次にはこの娑婆に還ってきて（還相廻向という）、苦の人たちを救うのだと教えられました。はつきりと「彼の国に到りおわって、六神通を得て、十方界に還って、苦の衆生を救摂せん」（『発願文』）と教えられたのであります。じつは浄土教では、このところが一番大切なのであります。ただ極楽浄土へ往き安閑として暮らすというのではないのです。その遺徳というものがこの世に還ってきて、それが人々の救いとならねばならぬのです。凡夫に徳などあるかといぶかる方がおられるかも知れませんが、凡夫でも、称えるお念仏が徳となるのです。その徳が還ってくるのです。次に起行ですが、そこでは称名（口に称える念仏）こそ最も大切なのであって、それが阿弥

陀仏の御意にかなうものなのだと教えられたのでした。

また、作業とは、専ら阿弥陀仏を命の続く限り念じ上げることであり、その裏面には、縁というものが働くのだとも教えられました。縁については種々教えておられますが、代表的なものに三縁の教えがあり、親縁（仏と親密になる）、近縁（仏と近くなる）、増上縁（滅罪して往生ができる）などが教えられております。

滅罪ということについても、それは念仏の功德によるのですが、懺悔するということが大切なのだとも教えられました。『般舟讃』に「念念の称名は常の懺悔なり」と仰せられておられます。

これらの教えは、曇鸞大師や道綽禪師の教えをいただいてきて説かれているものなのです。また大師の教えには、「二河白道」というすばら

しい例え話があるのです。『観無量寿経疏』に出

てくる話なのですが、水の河と火の河との間に
細い白道があり、悪党悪獣の誘惑や脅迫から逃
れて、この白道を渡り切る行者の話であって、

専心念仏者のあり方を示したものののです。こ
の話は有名で『広辞苑』などにも出ております
が、『太平記』のような古典にも出てきますし、歌
舞伎にも「女若二河白道」というのがあります。

大師の教えの根本は、「称名念仏こそ真に阿
弥陀如来様のみにかなった行為である」とい
う一点に凝縮されるのでありまして、法然上人
は、この一点を基点として浄土宗をお開きにな
られ、その開宗は「偏に善導一師に依る」と宣
言されたのであります。以って、念仏信仰系譜
の中で、大師のご存在がいかに大きかったかが
わかるのであります。浄土宗では大師を高祖と

崇め、元祖法然上人（円光大師）とともにおまつ
りして、両大師と申し上げているのです。

善導大師の法流

長安の都を中心にお念仏を弘めた善導大師の
もといは、「士女の奉ずる者、その数無量なり」
（『続高僧伝』）といわれるほど信者が雲集しまし
た。法然上人は中国で浄土経を弘めた高僧とし
て曇鸞・道綽・善導・懷感・少康の五師を挙げ
られ、浄土五祖とされましたが、懷感師は善導
大師の弟子であり、少康師は「後善導」と称さ
れたほどの善導大師の崇拜者であります。

懷感師は初め法相とか唯識という宗を学んで
いた長安千福寺のお坊さんでした。何事でも徹
底して納得しなければ気の済まない性格だった
そうでした、ちよつとばかり念仏して極楽往生



ができるとの教説に疑問を抱き、あるとき善導大師を訪ね、その道場に入り二十一日間念仏を称えてみたのでした。だが効験を感じることができなかったのも、自分には深い罪根があると悲観し、絶食して自殺しようとしたのですが、大師に止められ、その後三年間念仏して、仏様の出現を感得することができたというのです。

それからは熱心な念仏信者となり、念仏往生に対する種々の疑難に答えた『釈浄土群疑論』七卷（略して『群疑論』）を著されました。ただしこの書の完成を見ずに往生されましたので、弟子である懷惲師がこれを完成させたのです。

懷惲師は唐の高宗が全国に賢才を求めた際その候補者に挙げられたそうですが、固辞して出家した人で、善導大師の弟子となり、大師が往生されるとその遺骨を長安の南の神和原に納め

塔を建てました。そして大師が止住された實際寺の住職となったのです。この方は則天武后の帰依も受けたのでした。

このほか、浄業という方も大師の高弟だったとの説もありますが、これには否定説もあります。懷惲師についても、師は法相唯識の立場から浄土教を論じているとする批判説があります。しかし、法相唯識をも浄土教に帰結させようとしたご努力と見てはいかがでしょうか。

少康法師は十五歳で五部の經典を誦したという秀才で、越州（浙江省）嘉祥寺で受戒し、戒律のことを学びました。ところがある時、洛陽の白馬寺で、善導大師の遺文が光を放っているのを見て感激し、長安の大師の影堂に詣でてさらに靈感を得、以後専ら念仏を広めることに身を挺したのでした。その一方法として、子供が

お念仏の拡がり

一遍念仏を称えると一錢を与えたのでした。これが効を奏し、やがては老若男女みな念仏を称えるようになったのです。通俗的な歌も作って布教の助けにしたそうです。土地の人から非常に慕われ、「後善導」とまで称されたのでした。文諲もんしんという坊さんと共編で『往生西方浄土瑞応刪伝ずいおうせんでん』という書を著されましたが、こ

れは中国における独立した往生伝（極楽往生）たとされる念仏者の伝記）の最初のものといわれております。その教化力はすくなく、三千人もの人が雲集したと伝え、法師が念仏すれば口から仏様が出たとの伝説さえあるのです。最後往生の時には身から光明を放ったともいわれます。とにかく尋常な念仏者ではなかった証拠といえましょう。（後善導については後述の法照師にもその称あり）。

法然上人が、念仏信仰に慧遠法師流と慈愍三藏流と道綽・善導大師流との三流があると教えられたことは『選択集』すでに述べましたが、その中で、これまでふれていない慈愍三藏について述べておきます。

慈愍三藏とは、名も慧日えにち、唐代の方で（六八〇—七四八）、青州（山東省）の出です。早くより義浄三藏ぎじようがインドに法を求められた事跡にあらがれ、出家後の二十二歳の時、海路インドに渡り、十八年間にわたってインドや西域七十余国を旅し、その間、浄土往生の教えにふれ、とくにガンダーラ国で観音尊像に詣でて阿弥陀信仰の啓示を受け、長安に帰って玄宗皇帝より慈愍三藏の号を賜り、のち専ら念仏を布教し、慈

愍流念仏の祖と称されたのでした。その念仏は禪の教えをも加味したもので、『西方讃』その他の著書があります。洛陽で大往生を遂げられました（義浄三蔵は咸亨二年（六七一）から二十五年間にわたりインドなど三十ヶ国を巡り、梵字經典を持ち帰って翻訳した高僧です）。

道綽・善導大師流についても、ちよつと補足しておきますと、七世紀頃（唐代）迦才かさいという坊さんが長安におられまして、この方は撰論宗せんろんしゅうという学派を学んだ方なのですが、のち浄土教に傾き、とくに道綽禪師の『安樂集』を読んで、これをもう少し理論的に体系づけようとして、『浄土論』三巻を著したのでした。この書は中国では忘失しましたが日本に伝えられ、浄土教者に影響を与えたのです。迦才師は善導大師より少し先輩にあたる方で、道綽・善導大師

流には入らないにしても、道綽禪師の主張を受けた人として注目すべきでありましょう。

話を慈愍三蔵にもどしまして、この方に承遠しょうおんという弟子がおられました。この承遠師の門人に法照はっしょうという方がおられたのです。この法照師は、『無量寿經』に極樂の宝樹が風で音楽をなすところによって、念仏に音楽的なリズムをつけて称えることを発明したのでした。これは五会念仏といわれて、当時大変に流行し、やがて日本から入唐した円仁えんにん（慈覚大師）によって日本に持ち帰られ、比叡山の念仏となったのであります。この法照師もまた善導大師の後身であるとして「後善導」と称されたのでした。慈愍三蔵の系統でありながら後善導といわれているのは、当時、念仏をよく広めた方を「後善導」と称したことの証左でありましょう。もともと、

法照師は善導大師の教えもよく勉強しているの
であります。先に述べた少康師は法照師と同じ
頃の人であります。

このように中国唐代に浄土教はすばらしい展
開をみせるのでありますが、唐宋・五代になる
と、仏教界全体が衰微の傾向を示し、浄土教も
またその埒外ではありませんでした。

そして、宋代になると、いろいろな宗派が融
合したかたちの仏教が起るのであります。浄
土教もまた、そういったかたちのものとなり、
例えば、延寿という禪宗の坊さんは、禪と念仏
とを合わせた教えを説き、自ら浄土往生を願っ
たのでした。天台宗でも、知礼という方は『観
無量寿経』の註釈書を著し、その同門の遵式は
『往生浄土決疑行願二門』その他を著して、とも
に念仏を宣揚したのであります。戒珠かいしゆという方

が『浄土往生伝』を著しておりますが、この方
も天台系の人であります。律宗では元照師が『観
経』や『阿弥陀経』の註釈書を著しており、そ
の弟子戒度師は師の著をさらに論釈しておりま
す。

仏教の本質

このように、中国の浄土教は、非常に複雑な
かたちで発展してきているのでありまして、そ
れは私がこれまで述べてきたように、いかなる
教えの中にも念仏がある、念仏こそ仏教の本質
的なものである、ということの現われだと思考
するものであります。

そして、その念仏の底にあるものは、凡夫の
自覚であります。故に浄土教は凡夫教といっ
てよいと思うのであります。善導大師や法然上

人は、この「凡夫」ということを強調せられ、その凡夫を救う仏（阿弥陀仏）を、最高の仏とされたのであります。

このことは、中国浄土教の鼻祖的存在であられる慧遠法師の信仰にすてに見られるところでありまして、法師が念仏結社を結ばれた時の願文に、三世因果・善惡応報の理を知るからこそ西方浄土に済すくいを求めるのだ、とあるのであります。三世因果・善惡応報の理を阿弥陀仏に済すくっていたかどうかとするのは、自分がすでに凡夫だからであります。凡夫でなかったならば、自力聖道の法で解決できるはずであります。それができずに阿弥陀仏という救済主を求めたということは、凡夫の自覚があつたからであります。よう。ですから法師の膝下しひかに参入した一人に謝しやう靈運れいいうんという文人がいて、傲慢で知られた人です

が、法師に会いすっかりおとなしくなった、などという話もあるのであります。

中国だけではありません。朝鮮新羅に元曉がんぎょうという高僧がおりましたが（六一七—六八六）、この人は、念仏というものは本来凡夫のために説かれたものであり、兼ねて聖人にも教えているのだ、と喝破されたのであります。これこそ今日盛んに話題にのぼっております悪人正機説のさきがけでありまして、念仏というものは元来そういうものなのであり、それは論を尽くせば、仏教の本質は「凡夫性の自覚」ということにあり、そこから出てきた「念仏の教え」というものは、極めて仏教の本質的なものである、ということになるのであります（以上で中国編を終わらせていただきます。ありがとうございました）。

（函館・稱名寺住職）

謹

賀

新

年

總本山 知恩院

門跡 中村康隆

大本山 増上寺

法主 藤堂恭俊

大本山 金戒光明寺

法主 坪井俊映

大本山 百万遍知恩寺

法主 林靈法

大本山 清淨華院

法主 江藤澄賢

大本山 善導寺

法主 藤堂俊章

大本山 光明寺

法主 戸松啓真

大本山 善光寺大本願

法主 一條智光

法然上人御降誕地廿五霊場第一番
中国三十三観音特別霊場

誕生寺

〒709-36 岡山県久米郡久米南町里方八〇八
電話〇八六七二八―二一〇二

大正大学

理事長 大田秀三

埼玉工業大学

松川文豪

学校法人 大乘淑徳学園
淑徳大学・淑徳短期大学

理事長 長谷川良昭

〒174 東京都板橋区前野町五―五―二

平成七年 元旦

京都文教短期大学

学長 大河内良孝

〒611 宇治市慎島町千足八〇
電話(〇七七四)二一四一〇一

浄土宗宗務総長

成田有恒

〒154 世田谷区世田谷四一七一九
大吉寺

称名寺

〒040 函館市船見町十八一十四

松庵寺内無為窟

小川金英

〒025 花巻市南川原二八二一一
電話(〇一九八)二三一六六四

『指定都市選挙管理委員会連合会会長』
愚鈍院

住職 中村眞道

〒980 仙台市若林区新寺三十一一七
電話(〇二二)二五六一六〇五七

雲上寺住職

東海林良雲

〒985 塩釜市南町十一一

寺は生きているうちに行くとこ 西光寺

住職 樋口隆信

〒986 石巻市門脇町二一五一七
電話(〇二二五)二二一一二六四
FAX(〇二二五)九六一九〇九五

〒365 鴻巣市本町八一三三十一

勝願寺

電話〇四八五一四一〇二二七
藤田得三

大松寺

酒井亮貫

〒108 東京都港区三田四一―一三八
電話(〇三三)四五―一二四九四

浄土宗東京教区教区長
光取寺

住職 大室了皓

〒141 東京都品川区上大崎一五十一
電話(〇三三)三四四一―一八三八四

芝学園(芝中・高校)

理事長 真野龍海

天光院〇三三三四三一―一三三八
FAX〇三三三四三四一〇五六四

浄土宗梅窓院

住職 中島真成

年 新 賀 謹

〒112 東京都文京区小石川三丁目十四番六号

無量山 傳通院

電話東京三八一四局三七〇一番(代表)
振替東京六〇九三番

光円寺住職

佐藤良純

〒112 文京区小石川四丁目十一番一八

お寺は皆さんの相談所

浄心寺

小池政雄

〒113 文京区向丘二丁目十七番四

明顕山 祐天寺

住職 本多正雄

副住職 巖谷勝正

〒153 東京都目黒区中目黒五丁目二四一五三
電話(〇三)三七二一〇八一八九

教安寺住職

増上寺執事長

野呂幸進

横浜大光院

宮林昭彦

鎌倉大仏殿 高德院

住職 佐藤密雄

〒248 鎌倉市長谷四丁目二二八
電話(〇四六七)二二一〇七〇三
FAX (〇四六七)二二一五〇五一

榎戸薬師

浄土宗 正観寺

住職 宮沢善弘

横須賀市浦郷町二丁目七九

晴雲寺住職

塚田弘導

〒254 平塚市立野町六一五
電話(〇四六三)三二二一六三八

貞松院住職

山田和雄

〒392 諏訪市諏訪二丁目十六番二二

檀王法林寺

信ヶ原良文

〒606 京都市左京区川端通三条上ル

お骨佛の寺 一心寺

貫首 高口恭行

〒543 大阪市天王寺区逢阪二丁目一八一六九
電話(〇六七)七一〇四四四代

平成七年 元旦

入会のご案内

法然上人鑽仰会は浄土宗・宗祖法然上人のみ心に基づき、お念仏の信仰を幅広く、そして力強く進めることを目的として日々活動しております。

この『浄土』は、ご寺院方はもとより、一般在家信者の方々にも気軽に読んでいただけ、知らず知らずのうちに法然上人のお念仏のみ教えがご体

☆新・会・員・大・募・集☆

得ただけよう配慮し、多角的な視野で編集している、当会の機関雑誌です。

当会では随時、新会員を募集しております。檀信徒、お知り合いの方々にも、是非ともご購入をお勧めください。年会費は六、〇〇〇円です。

入会ご希望の方は、当会事務局までご連絡ください。早速見本誌をお送りいたします。

事務局だより

…バックナンバーを捜しています…

本誌は昭和十年四月号から発行（昭和十九年四月号から昭和二十三年八月号は休刊）してありますが、数度にわたる事務局の移転などにより、当会にも保存されていない号が幾つかございます。

もし皆様方のお手元に左記の号がございましたら、お手数ですが事務局まで一報いただければ幸いです。何卒ご協力をお願いいたします。

◎創刊号／十年六月号／十二年二月号／十四年五月、十一月号／十五年四月、五月号／十六年五月号／十七年二月号／二十四年五、七、十月号／二十六年七、十月号／二十七年六、八月号／二十八年二月／三十二年十二月号／三十四年四、十一、十二月号／三十五年十二月号／三十六年六、十二月号／三十七年八、十一、十二月号（以下次号に掲載）



●今号より小川氏と交代し、編集のチーフを仰せつかりました。元々編集のプロであった小川氏と違い、私は以前少しか難詰の編集の手伝いをしていただけの、ほとんど素人でありましたので、これからはいろいろな不手際が生じることが多いと思います。今後は皆様からお力、お知恵を拝借して、伝統ある『浄土』を継続してゆきたいと思っております。皆様からご意見、ご鞭撻をどしどしお寄せいただきたく、よろしくお願いいたします。

●今回、今法然上人にすっかり入れ込んでいると、自らおっしゃる梅原猛氏に、お忙しい中を特にご執筆いただきました。先生が『中外日報』へ連載されている「法然」も、すでに五十回を越え、先生の「法然上人観」も鮮明になつてきているようですが、ここでも先生らしい法然上人が感じられます。それぞれの人の中で、今も元気に息づく法然上人のお姿を伝えることこそ、法然上人を讃仰することになるのではないのでしょうか。

●今号より一年間表紙の写真は、ブナの原生林の写真をお届けします。写真を撮られている御所野洋幸氏は、何年にもわたって秋田県の本ナ原生林に入られ、ブナの写真を専門に撮られている写真家で、今までに氏の写真は市販のカレンダー等になっていますので、どこかで御覧になつていらっしゃる方もいらっしゃるでしょう。今号はご紹介だけになりましたが、次回からは近

来環境問題のキーワードでもあります「共生—共に生きる」をテーマに、撮影メモをご執筆いただくことになっていきます。お楽しみに。

●讃仰会の「讃仰」という字の由来を調べてみますと、論語の

「仰之弥高 鑽之弥堅（これを仰げばいよいよ高く、これをさればいよいよ堅し）」に由るとのこと、鑽という字はきり（錐）を指し、きりて穴をあけることを意味している。

上はどこまでも発展し、そしてたとえ不逞の者が会に穴をあけながごとく行動をしてしまつたとしても、決してそのようなことでは、びくともしませんよというこのお名前、なかなかのものだと感心するばかりです。私とき者が、会に身を置き、会の仕事をさせていただくことに、少しばかり安心を覚えました。

●地球温暖化が叫ばれて久しい今日、私たち一人一人の生活を真剣に考えなければならぬ時代のようにです。人々の価値観が安易な方向に流されている中、今こそ法然上人の御心に還つて、自らの生き方を見直してゆきたいと思つていきます。

編集チーフ 長谷川岱潤 (長)

スタッフ

栗田順一
齋藤晃道
村田洋一
太田正孝
石上俊教

●お知らせ

本誌をまとめて購入希望の方は、一部以上を単位に法然上人讃仰会までお問い合わせください。頒価その他について詳しくご説明申し上げます。なお、四月号以降の分も残部が少々ございます。

●お願い

本誌「浄土」への投稿は随時受け付けております。ただし、採否に関しては編集部にご一任ください。また、原稿は原則として返却いたしませんので、必要の方は必ずコピーをお取りの上お送りください。なお、採用させていただきますのは規定の稿料を連呈いたします。そのほか、ご意見、ご希望がありましたらご遠慮なくお寄せください。特に締切日は設けておりません。

編集部

浄土 六十一巻 一月号 頒価六百元
年金費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 平成六年十二月二十五日
発行 平成七年一月 一日

編集人 宮林昭彦
発行人 牧田諦亮
印刷所 株式会社 文化カラー印刷
写真植字 文化フォトタイプ

〒一〇五東京都港区芝公園四七四明照会館内
発行所 法然上人讃仰会
電話 〇三三五七八六九四七
FAX 〇三三五七八七〇三六



S★PPORO

私たちは味わい・ライフを追求します。

うまい、うまいで、カロリー半分。 自信作〈カロリー-half〉



サッポロ生ビール カロリー-half

飲酒は20歳をすぎてから

●ご協力をお願い：自動販売機による酒類の販売は、午後11時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社

LIFE TOGETHER



人間のやさしさをクルマに。

スピードおさえて、いい運転。シートベルトをしめましょう。

姿と、かたち。



これが、新しいセドリック

高級車を越え山奥大の豪華は、その姿とカタチである。
つくり手の強い意志が感じられる姿と、それを忠実に具現化した正統のフォルム。すなわち、カタチである。
まず、姿がいい。カタチがいい。新しいセドリックを見てほしい。

Cedric

日産のかたちを見てください。PHOTO: セドリックV30 ツインカムターボ プロラム

VIP ●全長4800×全幅1745×全高1410(%)主な装備 ●VG30DET(V6ツインカムターボ・総排気量2960cc)エンジン ●最高出力255PS/6000rpm(※NET値) ●最大トルク35.0kgm/3200rpm ●フルレンジ電子制御4速オートマチック(E-AT)(※NET値)とは、エンジンと車間に搭載した状態とほぼ同等条件で測定したものです。日産自動車株式会社お客様相談室 ●全国共通フリーダイヤル0120-315-232……………お近くのローレル販売会社へ。